

## 日本手話の文法概説、談話資料とその映像ドキュメンテーションの作成

研究所 脳機能系障害研究部 高嶋 由布子

日本手話は、聾学校を中心とするコミュニティで先天的に聞こえない者（ろう者）に継承されてきた言語で、音声日本語から独立した構造を持つ。手話話者の親をもつろう児は、手話を母語として習得し、定型発達児と同じ言語発達過程を経るが、こうしたネイティブ・サイナーはろう者の1割に過ぎない。また、手話母語話者であっても社会言語学的状況から音声日本語とのバイリンガル状況にある。手話の言語コミュニティは、手話を話さない聴者の親の元に生まれ、学齢期・青年期以降に手話を身につけた者を多く含み、言語の非定型発達者で構成されている。日本語の教育や補聴・医療技術の向上で、日本手話の話者数は減少し、日本語との言語接触度合いが高まり、急速に日本語に構造が近づきつつあるとみられる（赤堀・岡 2016; 高嶋 2020）。本研究は、言語環境や言語発達の多様性を考慮にいれ、日本手話の危機言語学的状況を考慮した言語保存のため、日本手話の文法概説の作成と映像資料の作成のモデルケースの創出を目的とする。

## 【調査】

対象者：多様な手話使用のなかで、言語発達が定型に近く、言語使用の均質性が高い集団として、

30～60代の関東地方在住のネイティブ・サイナーを調査対象とする。

語彙調査：関東の聾学校1校を選び、同校出身のろう者（親も同校出身）の基礎語彙200語を採

録（日本語が起点言語）。音韻のアノテーションの付与。また、関東一円の日本手話の音韻記述のためのインタビュー調査（手型や位置を起点とした日本手話を起点にした調査）。

文法調査：国立国語研究所の記述文法のための調査票を用いて例文を収録。

談話の採録とアノテーション作業：日本手話による個人の語りの動画は現存するので、より自然

な言語使用の収集を目指す。よく慣れた知り合い同士の自然なダイアログ（2～3人会話）を採録する。これにアノテーション付与と日本語訳を行い、話者本人と確認作業を行う。

## 【結果】

日本語を起点にしない語彙調査のほうが、手話辞典などに掲載がない事例など豊富な表現バリエーションが得られた。自然談話の採録では、現存する手話映像より速いテンポのものが採録でき、映像を見た話者たちからは普段通りの表出であると評価された。手話の映像データは、顔を含んでしまう以上、個人情報との紐付けが容易である。顔にも文法要素が表出されるため言語資料として顔を隠すことはできない。話者との話し合いのうえ、個人情報を含むが、内容がよい談話は別の話者で撮り直しを行った。公開に関する判断は、機械的に許可を得ることはできないことがわかってきた。解説や日本語訳を作成したうえで、どのような文脈でそれが使われるのかによっても使用の可否の判断が変わることから、固定メンバーで撮影を行い、信頼関係を築きながらの手順が必要であり、継続した議論が必要であることがわかった。

【参考文献】高嶋由布子. (2020). 危機言語としての日本手話. 国立国語研究所論集, 18, 121-148. // 赤堀仁美・岡典栄. (2016). 手話が言語だということは何を意味するか—手話言語学の立場から—. 森壮也・佐々木倫子 (編)『手話を言語と言うのなら』(pp. 7-21). 東京: ひつじ書房.